

◎ シリーズ 長岡京歴史散歩

(127)

長法寺小学校区の遺跡②
— 長法寺谷山遺跡と鉄の斧 —

1986年の夏、現在の光風台から弥生時代の遺跡が見つかりました。旧地名から「谷山遺跡」と名付けられました。西山から張り出した丘陵部の尾根筋です。裾に広がる平野部との高低差は、およそ25メートルもあります。今も急な坂道のある立地で、自転車のペダルをこいで登るのも、よほど脚力のある人でないと登りきれないでしょう。

ここから、竪穴住居跡が7棟と、掘立柱建物跡が1棟のほか、ごみ捨て穴などが見つかりました。掘立柱建物は、村の共同倉庫と考えられます。住居跡があることやその配置から、小さな集落だったことがわかります。住居やゴミ捨て穴から出土した土器から、弥生時代後期の短期間に営まれた村だったこともわかりました。

ではなぜ、当時大変不便に思われるこのような所に村を構えたのでしょうか。弥生時代中期に、水田に適さない高い地形の集落が各地で見つかっています。これらは「高地性集落」と呼ばれ、山や丘陵の先端部など、見晴らしのいいところに営まれています。

谷山遺跡も大変見通しのいいところにあります。でも、北と南は谷で、小規模な畑作と猟だけで暮らす、孤立した村とは考えられません。というのは、当時大変貴重な斧などの鉄製品が出土したからです。裾野にある集落との繋がりがなければ、鉄器を手に入れることはできないでしょう。

当時、倭国の各地で集団間の対立が激化していたと考えられていて、その情報伝達の通信に狼煙

を上げる役割を担った村が高地性集落ではないかと考えられています。谷山遺跡は、向日神社で見つかっている北山遺跡や、周辺部の高地性集落と連絡を取り合うことにより、裾野の村をはじめ、乙訓地域の政治的緊張の不安を解きほぐす、重要な任務を担っていたのではないかと考えられます。



▲谷山遺跡から北西を望む風景



▲谷山遺跡から出土した鉄器